HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	話者は「ノダ」文の内容をどう捉えるか : 既定性の再考
Author(s)	中野, 友理; Nakano, Yuri
Citation	研究論集, 10, 113-132
Issue Date	2010-12-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44604
Type	departmental bulletin paper
File Information	NAKANO.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

話者は「ノダ」文の内容をどう捉えるか

── 既定性の再考 ──

中　野　友　理

要　旨

「ノダ」文の持つ特徴として，しばしば命題内容の既定性が指摘される。本稿では，この既定性が「ノダ」によって生じる意味特徴といえるのか，また「ノダ」文の持つ既定性が具体的に話し手によるどのような事態の捉え方を表すものであるのかを考察する。

形式的，また認知的側面からの考察によれば，「ノダ」の表す意味とは，話者がある対象や事態を知覚した後に，さらなる認知活動を行ったことを表示するものと考えることができる。この検証として，「ノダ」文の使用に際して話者による一連の認知過程は想定可能であるか，また想定できない場合，その「ノダ」は話者のどのような認知状態の時に用いられ，どのような意味を持つと考えられるかということを考察した。結果として，話者による認知過程を想定できる場合は，話者がある事態を知覚判断した後にさらに疑問を持ち，それについて話者なりの答えを導くという認知活動がある。一方，認知過程を想定できない場合は，聞き手への伝達的用法として「ノダ」が使用されていると考えることができる。この「ノダ」の伝達的用法は，聞き手に対して話者自身の知識を伝えようとする状況において見られ，「ノダ」文の提示する情報について，話者が聞き手よりも判断したり管理したりする権限を持ち，逆に聞き手は話者から情報を与えられる側の立場であることが含意される。

「ノダ」の既定性について，本稿の結論は，文内容について話者による一連の認知過程が存在することであるとした。また，これを踏まえて「ノダ」の本質的な意味とは話者による一連の認知過程の存在を明示することであり，これまで聞き手への伝達場面において考察されてきた「ノダ」の意味は，本質的意味から生じる一つの用法として位置づけることができると考えられる。

1．はじめに

本稿は，しばしば「既定性」という言葉で説明される「ノダ」文の性質について考察し，既定性の意味するところをより明確に述べることを目的とする。具体的には，「ノダ」文の話し手が文の内容をどのように捉えているかということについて，形式的側面，及び認知的側面から考察し直し，それに基づいて「ノダ」の機能を提案する。また，この提案が実際の「ノダ」例を説明することができるかを検証し，最終的に「ノダ」が持つと思われる既定性とは何か，またそれは「ノダ」が本質的に持つ性質であるのかということについて答えを見出したい。

2．先行研究

「ノダ」文の命題について「既定」という性質を指摘する研究は複数存在する。三上（1953）が「ノダ」文の命題を「既成命題」としたのに始まり，これに従った国広（1992）は「既定命題」という用語を用いている。野田（1997）では，話し手が「ノダ」文の命題を既定の事態と捉えると説明されているし，田野村（1990）でも「既定性」を「ノダ」文の一特性として挙げている。

これに対して名嶋（2007）では，既定という概念が「ノダの特徴を包括的に説明することは必ずしも有効ではない」(p.68-69）と指摘する。「ノダ」文の特徴を既定に求めることの問題点の一つとして，名嶋は過去の事態を表す文との比較を挙げている。

(1)　a．（残しておいたケーキがないのを知り）あっ，誰かが食べたんだ。
　　b．（残しておいたケーキがないのを知り）あっ，誰かが食べた。

（名嶋 2007：67）

名嶋によると，(1)において事態が既定であるという話し手の認識を表すのは，過去を表す言語形式であり「ノダ」ではないという。この指摘から，名嶋のいう「既定」とは，事態の成立という話し手の捉え方を意味するものと思われる。

名嶋（2007）でも指摘されているが，話し手がある事態を既定と捉えることが果たしてどういうことをいうのか，先行研究では明白に説明されていない。このために(1)のような，「ノダ」と過去を表す形式との間の意味の差も議論に上ることになるのである。「既定」とは，「ノダ」の特徴をどのような側面から述べた性質であるのかを明らかにすることが本稿の課題である。

また，「ノダ」文が既定性を持つとして，この性質が実際の「ノダ」文を用いた発話において，どのような機能や効果を生じさせるのかも解決すべき点である。ここでは，「ノダ」に関する最近の見解として，梶浦（2008）と藤城（2007）を挙げておこう。

梶浦（2008）による関連性理論に基づいた考察では，「ノダ」を手続き的意味を担う要素と位置づけており，その機能を(2)のように述べている。

(2)　ノダの手続き的意味：ある疑問･課題に対する答えとしてその提示する命題を処理せよ。
（梶浦 2008：36）

梶浦による指摘は，関連性理論に基づいた考察という点がこれまでの多くの「ノダ」研究と異なるものの[1]，「ノダ」の機能を「説明」とするこれまでの研究での主張は踏襲されているように思われる。そうなると梶浦以前の多くの先行研究において，繰り返し指摘されてきた問題点が，梶浦（2008）において解決できているかどうかが重要であろう。それは，「ノダ」文の提示する答えがどのような疑問や課題に対するものであるかが，常に明らかであるとは限らないという問題である。また，これに加えて，「ノダ」文に先行する疑問や課題が設定できても，その答えの提示に必ず「ノダ」文が用いられるとは限らないという点も，解決すべき疑問の一つとして残る。

(3)　a．【博子に，秋葉がすぐに来ることを伝えた女性が突然話題を変える】
私，秋葉先生のこと好きだったんです。
（映画「Love Letter」より）

b．【母親のもとに走り寄ってきた子どもが】
ねえねえ，ぼくね，大きくなったらアンパンマンになるんだよ。

c．【放映中のドラマの登場人物について話していたところ】
A：あのドラマ，何曜日だったかな～。
B：水曜日｛だよ／？なんだよ｝。

（3 a）は「ノダ」文の前に関連する話題が提示されておらず，また話題の人物（秋葉）も会話場面にいないので，「ノダ」文の内容を答えとする疑問や課題の設定が難しい。（3 b）も，話し手が何らかの疑問や課題の答えとして「ノダ」文を提示したといえるのか疑問である。一方で，（3 c）の「ノダ」文は A の疑問に対する答えであり，さらに話し手が文内容を事実として成立する，つまり「既定」と捉えているといえるのにも関わらず，自然な応答とはいえない。このように(2)の説明では，実際の「ノダ」文の使用を理解するのに困難な場合がある。

---

[1] 関連性理論に基づいた研究が梶浦（2008）以前に全くないわけではないが，その代表である名嶋（2007）について，梶浦ではいくつかの問題点を指摘している。また名嶋以前にも竹内（1994）や内田（1998）がある。

一方，藤城（2007）では，「ノダ」の使用について「事実認識のギャップ」「既定性」「題述性」という三つの必須要素に加え，「ノダ」を使用する動機が必要であると説明されている。特に藤城（2007）においては，「ノダ」使用の動機の一つである「ギャップへの意識を示し出すことによる効果」について主に論じられており，「やわらげ」や「強調」といった「ノダ」が持つとされる用法を説明している。

話者が自身の事実認識を明示することによって，「〈それとは異なった事実認識や現実〉への意識を示唆し，そこにギャップが示し出される」（藤城 2007：183）という藤城の説明は，「ノダ」文の（または「ノダ」文以外の文についても）発話動機として否定できないものである。しかし，そもそも会話参与者間，または話し手による新たな事実認識の前後に多少なりともギャップがあり，それが意識されることは，「ノダ」文を使用した発話に限ったものではない。「ノダ」の使用は，話し手がそのギャップをどの程度大きいものと捉えるかに拠るということであれば，「ノダ」文の使用／不使用を決定づけるギャップの程度の基準が必要となって来よう。藤城（2007）に対する以上のような疑問は，(4)のような「ノダ」例において見られる。

(4)　a．あ，虹｛だ／#なんだ｝！
　　b．A：あなた，ダイエット中だから甘いもの食べないでしょ。
　　B：食べる｛よ／？んだよ｝。

（4 a）の文では，「ノダ」の有無に関わらず，話し手の事実認識の前後にギャップの存在が認められるが，「ノダ」の使用は話者のどのような意識の違いを明示するのか。また（4 b）でも，「ノダ」文の話者 B は，会話参与者間の認識の違いを明示する必要があると思われるが，（4 b）の状況では「ノダ」を用いない発話のほうが自然である。以上のような「ノダ」の使用・不使用について，藤城の説明では不十分な点がある。

梶浦や藤城における指摘は，一部の「ノダ」文については説明できるとして，説明が困難な例についてはどのように対処するのか，更なる研究成果を確認する必要がある。本稿では，梶浦や藤城が指摘する「ノダ」の機能や，「ノダ」使用による聞き手の解釈への影響がどのように生じるのかということも，第四節において検証を兼ねて論じたい。次節では「ノダ」文の持つ特徴について，既定という性質を手がかりに考察する。

3．「ノダ」の機能の提案

本節では，「ノダ」の既定性と呼ばれる性質がどのようなものかを，形式的側面，及び話し手の認知的側面から考察し，最終的に本稿における「ノダ」文の性質を提案する。

3.1　形式的側面の考察

ここでは考察の出発点として，まず「ノダ」が持つ機能を形式的側面から考察する。野田(1997)では，文末に「ノ（ダ)」が用いられる場合，述語によって表される事態の成立以外の部分も否定などのスコープに入ると説明されている。

(5)［悲しくて泣いてる］んじゃない。［嬉しくて泣いてる］んだ。

（野田 1997：35）

「ノダ」のない文では，直前の述語部分だけが否定のフォーカスであるのに対して，(5)の「ノダ」文では［　］内がスコープというひとつのまとまりに入ることで，否定のフォーカスがそのまとまり内の一部に当たることも可能になる。これは，「ノダ」に前接部分をひとつのまとまりとみなす機能があるということである。同様の指摘は三上（1953)，林（1964)，佐治（1991）などでも見られる。但しこの指摘は，野田（1997）においても「ノ（ダ)」という表記を用いて述べられているとおり，「ノダ」の持つ機能というよりも「ノ」の持つ機能であろう。

一方で，「ノ」に接続する「ダ」については，「取り上げた事柄や述べている内容に対する話し手の肯定的な認定判断として断定する」（森田 1989：620）助動詞と説明される。そうすると「ノダ」とは，ひとつのまとまりとしてみなされる「ノ」の前接部分について，「ダ」がさらにその成立を認定判断すると分析できる。このため，先行研究では「ノダ」の意味について「二重判断」（国立国語研究所 1951，林 1964）と説明されることもある。このように文末の「ノダ」は，それ一つで助動詞としての機能を持つと考えられているものの，その働きには「ノ」，及び「ダ」の意味特徴が影響を与えているという形態的な分析が先行研究でもしばしばみられる[2]。

本稿においても「ノダ」の本質的機能を提案する上で，語構成上導かれる意味特徴も考察の手がかりとする。ただ，「ノダ」の場合は，「ノ」と「ダ」それぞれの意味の統合以上の機能がみられることも否定するわけではない。そこで，次節では，「ノダ」使用における話者の事態認

---

[2] 他に，「ノ」単独での機能考察が可能である根拠として，まず「ノ」に接続する文末の形式として「ダ」とその活用形「デ」以外にも，「カ」「カモシレナイ」「ダロウ」「ヨ」「ネ」などがあること，さらに「ノ」だけの使用も可能であり，これを「ダ」の省略であるとすることに十分な証拠がないことから，「ノ」と「ダ」が完全に結合していないという点を挙げることができる。ただし，これに反する現象として，「ノダ」が音声的に短縮化されて「ンダ」となるということを，一語化から来るひとつの現象として挙げることもできる。また，文末で「ダ」「デス」の前に現れる「ノ」と，文中で名詞に準ずる扱いを受ける，いわゆる準体助詞の「ノ」の違いを，発話者がどの程度意識しているかも疑問である。

このように，文末の「ノダ」が語用論的機能を持つことは必ずしも否定できないものの，「ノダ」の形態統語的特徴からくる意味としては，文の叙述内容に接続される「ノ」と，さらにそれに付与される「ダ」のそれぞれの意味機能を考察すべきである。

識や発話意図など，心的側面についての考察を行う。

3.2　話者の認知的側面の考察

上述した「ノダ」の形式的特徴が，話者による事物の捉え方をどのように反映しているかを明らかにするため，以下では発話者の認知的側面について考察する。

前接部分を一つのまとまりとする機能が「ノ」にあると既に述べたが，「ノ」に関しては加藤(2003) でも集合的認知という概念が説明されている。

(6)　a．「5個のリンゴがほしいんですが」
　　b．「リンゴを5個ほしいんですが」

(加藤 2003：454)

加藤 (2003) では，連体数量詞文 (6 a) と遊離数量詞文 (6 b) について論じられており，それによると，連体数量詞文では話し手が対象を「まとまりのあるもの」と見なしていることが言語に表示されているということである。すなわち (6 a) では「5個のリンゴ」がまとまりとみなされているので，2個パックや3個パックではなく，5個パックのリンゴを買おうとしている場合においてのみ適格となる。これに対して，(6 b) の遊離数量詞文は話し手が対象を「まとまりのあるもの」と見なしておらず，ばら売りのリンゴを指す場合においてのみ用いられる。連体数量詞文の名詞句について「まとまりのあるものと見なす」という話し手の捉え方を，加藤は「集合的認知」と呼び，さらにこれを「既定的単位」と言い換えている。

「ノ」を用いた(7)は，パック詰めのリンゴを指す (6 a) と言い換えることができるが，(6 b) とは言い換えることができない。

(7) 「リンゴ5個のがほしいんですが」

(7)は「リンゴ5個の」が「5個のリンゴ」と同様に「既定的単位」であり，話し手が「ノ」の使用によってその前接部分の表す事態をまとまりとみなすことを示唆している。

加藤における「既定的単位」とは，認知対象とその周囲の情報処理活動が完了した状態であるという。これは，前景となる図 (figure) を，背景である地 (ground) から分化させる，つまり周囲の世界からある対象を切り取って概念化する知覚段階において言語化した表現と捉えることができる。さらに，知覚した対象について，何らかの判断を下すことを，心理学においては (高次の) 認知段階と言われている。ここでの「知覚」と「認知」の違いについては，以下のように詳しく説明される。

一般的に認知は，大きく三つの段階に分けられる。感覚受容器による情報処理である感覚，

さらに複雑な処理を行う知覚，そして「概念化や記憶とのやりとりなど高次の処理がかかわる場合が一般に認知とされる」(辻編 2002：175)。これら一連の活動は「能動的かつ主体的な情報処理」(辻 1991) であり，本多 (2005) でも知覚における探索活動という能動的運動とその言語化について説明されている。また，認知についての，池上 (2001) による以下の記述では，最後の認知の完了に当たる文として「ノダ」文が使用されている。

(8) 夜中に眠りの浅くなった状況の中で，何か音が聞こえてくるように思える ── このレベルでは，問題になっているのは本人の聴覚器官で何かが起こっているという身体内的な出来事である。これは〈感覚〉(sensation) と呼ばれるレベルの出来事である。それが気になってやがて目が覚める，そして耳を澄ますと音は屋外から聞こえてくるもののようである ── このレベルでは，聴覚的な刺激の源が身体外の空間のあるところに存在するものとして位置づけられたことになる。これは〈知覚〉(perception) と呼ばれるレベルの出来事である。しかし，外でしている音は風の音だろうか，雨の音だろうか ── そう考えた上で，水滴の音のようだから雨が降り出したのだと判断する。このレベルでは，問題の出来事がどういうことなのか ── つまり，出来事の意味 ── が読み取れたことになる。これが〈認知〉(cognition) と呼ばれる段階である。

(池上 2001：70-71)

事態がまとまりを持つ単位と見なされることが，何らかの情報処理の完了を表すのだとすれば，「ノダ」は，話者がある事態について何らかの意味づけをする段階まで認知が完了したことを示すと予想される。

形式的にいっても「ノダ」は，知覚した事物や事態が一つのまとまりとして表され，それについてさらなる判断がなされるという意味だと分析することが可能である。また，「ノダ」に関するこれまでの先行研究において，「ノダ」文の話者は自身が既に持つ情報について「説明」(久野 1973) したり，「関係づけ」(庵 2001) て述べたり，また「背後の事情」(田野村 1990) を提示したりすると説明されてきた。前章で紹介した梶浦 (2008) でも，「ノダ」文の命題が疑問や課題の答えとして認知処理されると指摘しているが，これらの見解は「ノダ」文の発話に先立って，話し手が既にある情報を処理していることを意味する。つまり「ノダ」文の話者は，ある対象や事態について既に知覚段階は終えており，それに関するさらなる認知活動が行われる。その最終段階である認知の段階で「ノダ」文が発話されると考えることができる。以上の考察から，「ノダ」文の話者の認知状態は，以下の(8)のように説明できよう。

(9) 「ノダ」文の話者は，ある対象や事態を知覚した後にさらなる認知活動を行い，それを完了させた段階にある。

⑼で，話者が認知を完了させた段階であると捉えられる点が，「ノダ」の性質として指摘される既定性につながると思われる。さらに本稿では，⑼に基づいて「ノダ」の持つ機能を以下のように提案する。

⑽ 「ノダ」は，話者による一連の認知過程が存在することを明示し，「ノダ」文の内容は話者による認知判断の結果である。

⑽の提案が妥当であるとすると，「ノダ」の既定性とは，話者の認知活動における完了状態を示すということができる。尚，「ノダ」が話者の認知過程の存在を示すことは，角田（2004）でも指摘されている。角田では「ノダ」が思考プロセスに沿って用いられると説明されており，本稿における提案は角田の考えを一部支持するものである[3]。角田においても様々な例を提示して，「ノダ」文使用に際する話者の思考プロセスの存在を説明しているが，本稿でも次節で，⑽の「ノダ」の機能の妥当性を検証するために具体例を挙げていく。

---

[3] 本稿の提案と角田（2004）における思考プロセスで異なる点は，本稿では「ノダ」が話者による認知過程の存在を示すことが基本的性質としている点，そしてその認知過程が完了している状態と設定している点である。後者の違いについては，角田による思考プロセスでは第二段階「疑問」に「ノカ」，また第三段階の「推察」に「ノカ（ナ）」や「ノカモシレナイ」等が用いられるので，これらの形式も含めると全ての思考プロセスの段階で「ノ（ダ）」が表れるとすることも可能であろう。

一方，本稿においては「ノカ」を「ノダ」に含めずに考察することとする。この理由を以下に二点述べる。まず一点目としては，「ノダ」における「ノ」の機能について 3.1 及び 3.2 で既に述べたが，「ノカ」においても「ノ」が単独で持つ機能に疑問をマークする「カ」が接続されたと考えることが可能であるからである。そうであれば，「ノ」に肯定の判断を示す「ダ」がついた「ノダ」と，「ノ」に疑問を示す「カ」がついた「ノカ」では，全く異なる意味を持つと考えるのが妥当であろう。

さらに二点目として，以下の二文はどちらも通常「ノカ」文の例とみなされるが，聞き手に向けて発せられる（ib）だけに「デス」，つまり「ダ」の丁寧形が表れる。つまり（ib）のみ「ノダ」に「カ」が接続したものと考えることも可能である。

（ｉ） a．彼も行くのか？
　　 b．彼も行くのですか？

通常（ib）は，聞き手に質問する（ia）の丁寧体としかみなされない。しかし，（ib）は聞き手に対する発話でしか通常は用いられないのに対し，（ia）は聞き手への疑問のみならず，独話でも用いることが可能であることから，「ノカ」と「ノデスカ」は，聞き手への待遇だけではなく聞き手の存在そのものが使用条件に入るか入らないかという違いがある。以上から，本稿では「ノカ」を「ノダ」の変異体として含めず，また「ノデスカ」については機会を改めて詳しく考察したい。

4．検証

前節において提案した「ノダ」の機能が，発話状況によって様々な用法を見せる「ノダ」文を説明することができるかを検証する。具体的には，次の三点について考える。一点目として，「ノダ」の機能が本稿の提案に従うものだとすれば，「ノダ」によってその存在が示される話者の認知過程とは，どのようなものであるか。話者の認知活動のプロセスを想定し，対象を単に知覚した段階での言語化とはどのように異なるかを明らかにする。これは，「ノダ」における既定性の内実をより明らかにする課題であるといえる。

また，本稿の提案が実際の「ノダ」例に当てはまらない場合には，以下の二点について再考する必要がある。まず，「ノダ」文が話者の認知過程の完了状態を表さないとすれば，誰の，どのような認知状態を表すといえるか，代案を出す必要がある。次に，この「ノダ」の使用がどのような効果を発揮すると見込まれるか，「ノダ」文を使用する話者の動機を各発話状況から考察する。

4.1　考察点①

4.1.1　「ノダ」文の話者の認知過程

本稿の提案どおり，「ノダ」文によって話者による認知過程の存在が示されていると思われる例を挙げて，その認知過程がどのような流れで行われるのか，先行研究における言及も参考にしながら明らかにしていく。

まず庵他（2000）では，⑾の「ノダ」文を解釈用法と説明し，この「ノダ」文の話者の認知過程について⑿のように図で示している。

⑾　（朝起きて道路がぬれているのを見て）ゆうべ，雨が降ったんだ。

（庵他 2000：270）

⑿　道路がぬれている　　⟶　　ゆうべ，雨が降った

既知の事実　　理由　　想像する事態

（庵他 2000：272）

「ノダ」の解釈用法とは，話者が既に知っている事実に関連づけて，話者なりの解釈を「ノダ」文を用いて明示することであると庵他では説明されている。⑿の説明をもとに考えれば，「ノダ」文の話者の認知過程とは，発話に先立って「①ある事実を認識し，②その事実が生じる理由を考え，③結果として想定される事態を提示する」という流れであるといえる。

話者による認知過程の完了という想定が可能な「ノダ」の用法として，もう一つ「発見用法」がある。⒀は「ノダ」の発見用法として提示される例である。

⑿　（一人で泣いている子供を見て）きっと，迷子になったんだ。

（庵他 2000：270）

名嶋（2007）では，話者の事態認識を⒁のような段階で捉え，このうち「ノダ」の発見用法とは，③の「確定段階」で用いられる「ノダ」文のことを指すと述べている。

⒁　①「状況知覚段階」：あ，財布がない。
　　②「不確定段階」：落としたのか，取られたのか，忘れたのか…。
　　③「確定段階」：忘れたり取られたりしたのではない。きっと落としたんだ。
　　④「既定段階」：（どうしたの？と問われて）財布を落としたんだ。

（名嶋 2007：112）

すなわち話者の認知過程とは，名嶋における⒁の①から③の段階で述べられているものであると考えられる。

さらに角田（2004）では，人間の「思考プロセス」を「１．認識→２．疑問→３．推察→４．答え」と設定し，「ノダ文が出現する際には，『思考プロセス』を想定することができる」（角田 2004：73）と述べている[4]。一連の思考プロセスが言語化された例が⒂である。

⒂　あれ，外でみんなの声がする。［１．認識］
　　日曜日の朝なのに，どうしてだろう。［２．疑問］
　　何かあるのかな。［３．推察］
　　あっ，今日は町内会でゴミ拾いをするんだった。［４．答え］

（角田 2004：74）

一方で，「ノダ」文の中には，話者による認知活動が行われたとは想定しにくい状況で使用される例も多く存在する。現に，「ノダ」の解釈用法や発見用法は「ノダ」の機能のほんの一部である。これまでの「ノダ」研究において解釈用法や発見用法は，「ノダ」の主要な用法という位

---

[4] ただし角田（2004）では，思考プロセスが全て一人の人物によって構成されるものとは考えられていない。

（ii）　A：昨日，練習休んだね。［１．認識］
　　どうしたの？［２．疑問］
　　また，さぼったの？［３．推察］
　　B：お腹が痛かったんだよ。［４．答え］　（角田 2004：74）

置づけさえなされていない。

また，話者による認知過程の流れとその完了の一部始終が常に言語化されているわけではないので，「ノダ」が話者の認知過程の完了を明示するということを，発話された内容から裏付けることはできない。角田は，「ノダ」が「前後の脈略がないようなところでも，突然，現れることもある」（角田 2004：103）と認めた上で，「自分の気持ちの中で一瞬，『これはどういうことだろうか→こんなことでよいのだろうか』といった問いかけをし，『（やはり）これでいいのだ』と納得している，と考えてもよい」（角田 2004：104）と，言語化されていなくとも「ノダ」使用の背景には必ず思考プロセスが想定できることを主張している。しかし，上記の主張では，「ノダ」の思考プロセスの存在が十分証拠付けられたことにはならないであろう。

本稿でも次節において，話者による認知過程の流れとその完了が想定しにくい例について考察することにする。

4.1.2　話者の認知過程が想定しにくい例

本稿での提案に当てはまらないと思われる「ノダ」例，つまり「ノダ」文の使用に，話者による一連の認知過程とその完了が伴っているとは思われない例を以下で取り上げる。まず⑯のように，話者個人の情報について「ノダ」文で提示される場合である。

⑯　ぼく，27 歳なんですよ。

⑯では，話者個人の情報に対して，話者自身が疑問を持ち，その答えを見出そうとするという，4.1 節で提示したような認知過程は想定できない。

梶浦（2008）で挙げられた例も，本稿で提案するような話者による認知過程の流れを想定することは難しい。

⑰　パーティーですごい女優に会ったよ。ヴァネッサ・レッドグレイブに会ったんだ。

（梶浦 2008：37）

さらに⑰の例では，⑱のように第一文に「ノダ」を用いることも可能である。⑱でも角田が主張するようなノダの思考プロセスは全く言語化されていないので，その存在を想定することは容易ではない。当然，本稿における提案にも⑱が合致するとは思われない。ちなみに⑱は，梶浦の提案した「ノダ」の手続き的意味，「ある疑問・課題に対する答えとしてその提示する命題を処理せよ」という説明にも当てはまらない。この点については，二節で提示した梶浦への反例(3)（⑲として以下に再掲）も同様である。

⑱　パーティーですごい女優に会ったんだよ。

⑲　（← 3 a，b）

　　a．私，秋葉先生のこと好きだったんです。

　　b．ねえねえ，ぼくね，大きくなったらアンパンマンになるんだよ。

⑱及び⑲では，「ノダ」文に先立って疑問や課題が設定できないということが，一つの共通する特徴である[5]。疑問や課題の設定が困難であれば，4.1.1 で提示した，ある疑問や課題の答えとして提示される「ノダ」文とは，全く認知過程を異にするといえる。

⑯-⑲の「ノダ」文が疑問や課題を想定できないということ以外に，さらに二点の共通する点を挙げることができる。一点目は，これらの「ノダ」文の内容が，発話以前から話者の知識として既に保持されている点である。⑯の「ノダ」文では，話者個人の情報が提示されているが，この類の情報は通常，話者のみが知識として保持しており，聞き手には取得しにくい情報もある。田野村（1990）によると，「ノダ」文には披瀝性があるので，聞き手には得難い話者の個人的な情報を提示する場合は少なくないといえる。そして⑰-⑲も話者が既に知識として保持する情報を提示する。

二点目は，いずれの「ノダ」文にも聞き手が存在し，聞き手に向けて「ノダ」が発話されている点である。このように，話者が発話以前から持つ知識を「ノダ」文によって聞き手に提示することがあるということは，本稿における提案が「ノダ」の本質を正確に捉えていないという結論に至るであろう。これらの「ノダ」は，話者のどのような認知状態を表し，そしてどのような目的で発話されるのか考察する必要がある。

4.2　考察点②

本節で検証すべき点の一つ，「ノダ」文が話者の認知過程の存在を示さないとすれば，一体誰の，どのような認知状態を示すのかという問題について考察する。これについては，上述したとおり，「ノダ」文は話者が発話前から保持する知識を提示するというのが現時点での答えとなろう。

もう一つの検証すべき課題である，話者の認知過程を想定できない「ノダ」文使用の目的，または動機についても考察してみることにする。これについても 4.1.2 で挙げた「ノダ」文の共通点として，聞き手に対する発話であるという点を既に述べた。したがって，「ノダ」文を発話することで聞き手に対するある伝達的効果を話者が期待しているといえる。そうすると，「ノ

[5] ⑰や⑲のような例について，庵他（2001）では，通常先行文と関連づけられるはずの「ノダ」文を先行させ，後続文への関心を高めるために「ノダ」が用いられるとし，これを「ノダ」の「先触れ」用法と呼んでいる。

ダ」文の内容は話者が既に保持する知識であるのだから，話者の認知過程が想定できない「ノダ」文では，話者の持つ知識を聞き手に伝達するという動機によって発話されていると予想することができる。しかし，話者の知識は「ノダ」文を用いずとも聞き手に伝達することが可能である。それをわざわざ「ノダ」文によって伝えようとする動機は何であろうか。これについては，以下のような予想ができる。

ここでは，「ノダ」の本質的な機能が，本稿で提案したとおり「発話内容が話者の認知過程が行われた結果を表わす」としよう。話者はこのような機能を持つ「ノダ」を使用することで，言及対象について，自身が一連の認知活動を行った上で，その判断結果を言語化して提示しているかのように聞き手に伝達することができる。ある情報を話者自身が認知判断した結果であるかのように表現すれば，その情報を保持あるいは管理する権限が，聞き手ではなく判断者である話者にあること，すなわち発話内容について判断者，そして情報管理者として，話し手は聞き手よりも優位な立場にあることを含意することができる。一方で，聞き手は「ノダ」文の話し手の知識をただ与えられる側であり，その情報について判断を行う立場にはないということが伝えられると考えられる。

このように考えると，「ノダ」文が披瀝性を持つということも，聞き手は「ノダ」文の情報を判断したり保持したりする立場ではないという含みが「ノダ」文にあるからだと考えられ，田野村（1990）などが指摘する「ノダ」の特性と矛盾しないのである。

以上の考察は，たとえ「ノダ」文が話者の個人情報を提示しているわけではない場合にも当てはまる。⑳は藤城の提示する例であるが，「ノダ」文の内容は，話者と同様に聞き手も取得可能な事実である。

⑳　犀川「あんたねえ，人ひとりが死んでるんだぞ！」（伴一彦「サイコドクター」）
（藤城 2007：176）

藤城によると⑲の話し手は，聞き手との認識のギャップへの意識を「ノダ」で明示することで，聞き手に適格な事実認識を求める効果があるという。では，話者が聞き手に認識のギャップを明示し，適格な事実認識を求めることができるのはなぜか。それは，聞き手ではなく話者のほうに，情報を判断して管理する権限のあることが「ノダ」文に含意されるからだと思われる。「ノダ」がなければ，文内容は単なる事実の叙述にすぎず，話者と聞き手の認識の差は示せても，どちらかが文の表わす情報の取得に優位な立場にいるということは示されない。

以上のような予想が適切であれば，発話内容が話し手による認知判断の結果であるかのように聞き手に提示するという「ノダ」の使用は，本稿の提案に全く反するものではない。「ノダ」本来の機能である，話者によって認知判断された内容の明示ということが，聞き手に対して意図的に伝達される場合の一用法といえる。つまり「ノダ」の使用によって，発話内容が話者自

身の認知判断の結果であると明示できるからこそ，発話情報に対する自身の優位な立場を聞き手に伝え，実際の会話において「ノダ」による効果を期待することができるのである。聞き手に対する「ノダ」の使用では，「ノダ」本来の意味が見られるわけではないものの，これを応用した形で発揮される伝達的機能が，本来の機能以上の頻度で会話において利用されていると本稿では位置づける。

4.3 「ノダ」文の使用が不自然な例

検証の最後に，「ノダ」の使用が不自然になる例について，4.2 における考察に従って説明ができるか否かを確認する。まず，「ノダ」文の不自然な使用例として，(3 c) を以下に再掲する。

(23)　(← 3 c)

A：あのドラマ，何曜日だったかな～。

B：水曜日｛だよ／？なんだよ｝。

(23 B) が，聞き手 A の疑問に対して「ノダ」文を用いて応答する場合は，その発話内容について聞き手 A よりも，情報を管理している者として優位な立場にいることを表わす。つまり，B の発話は，「ドラマが水曜日に放映されること」を知るはずもない聞き手に教えてやるという印象を聞き手に与える。B が言及されているドラマの関係者であるなど，聞き手 A よりもドラマの放映日時について詳しい立場であることが A と B 両者にとって明白であれば，「ノダ」の使用も不自然にはならないと思われる[6]。しかし，そうでなければ，B が自身の提示する知識について，聞き手 A より優位な立場であると「ノダ」によって示すことは，結果的に当該情報を知る立場にないとみなされる A のフェイスを脅かす恐れもあるであろう。

これに対して(24)では，「ノダ」文の使用に不自然さが感じられない。

(24)　【あるドラマを見ようとテレビをつけたが，別の番組が放映されている】

A：あれ，あの刑事ものって今日じゃなかった？　何曜日だったかな～。

B：火曜か水曜だったはずだけど…。今日じゃないってことは，水曜日なんだよ。

(24)の場合，B は A の提示した疑問について自身の経験知識をもとに推論を行っていることが言語化されている。つまり聞き手に対する発話ではあるものの，「ノダ」文の話者による認知過

---

[6] ただし，「ノダ」文の話者 B が聞き手 A よりもドラマの放映日時について詳しい立場であることが両者にとって明白である場合，A が B に対して直接ドラマの放映日時を訊ねるというのが，(23)の場面においては最も自然であろう。

程の存在が明らかであり，自身の判断結果の内容にマークされる認識的機能として「ノダ」が使用されているとも解釈できる。その分，話者自身の情報への権限を主張する「ノダ」の伝達的機能は弱まり，結果的に聞き手のフェイスを脅かす危険性も軽減する。このように「ノダ」が，話者の認知過程の存在を示す認識的機能として働いているか，または発話内容における話者の情報管理者としての優位性を示す伝達的用法として用いられているかは，聞き手の存在だけではなく，「ノダ」が接続される文内容や，他の語との共起など，複数の要素によって判断されると思われる[7]。

続いて（4 a）を⑿として再掲する。

⑿　（← 4 a）
　　あ，虹｛だ／#なんだ｝！

⑿は，話者が何気なく空を見上げて虹を発見した際の発話であれば，話者が対象を知覚したことを言語化したものと捉えられる。話者による知覚判断段階以上の認知過程が想定できないので，「ノダ」の使用は不自然である[8]。一方で，周囲の人が空を見上げており，「なぜ皆が空を見上げているのだろう」と自分も空を見上げた結果，虹を発見したという状況であれば，「ノダ」文を使用できる。この場合，「周囲の人間が何かを見上げている」事態を知覚し，「何か」という課題を解決しようとする話し手の認知活動の存在が想定できる。この場合⑿は，「ノダ」の認識的機能が働いている例といえるであろう。

続いて（4 b）を⒀として再度提示する。

---

[7] ⒁の状況において，話者による認知過程が全て言語化されずとも，「ノダ」が認識的機能を発揮するものと解釈できる場合もある。

（ii）【⒁の状況で】B｛たぶん／きっと｝水曜日なんだよ。

（ii）では，「たぶん」「きっと」などの副詞の使用が，話者による認知過程の存在を示唆し，「ノダ」文の内容がその判断結果であると解釈することを可能にする。

逆に，終助詞「ヨ」の使用は，その文が聞き手に向けて発せられたことを示すものであり，その文に用いられている「ノダ」も伝達的用法として機能するという解釈を可能にすると思われる。ただし，「たぶん」と文末の「ヨ」がともに用いられる（ii）では，「ノダ」文が認識的機能として働いているように解釈できる。

さらに発話に伴う音調も，「ノダ」が認識的機能として用いられているか，伝達的機能として用いられるかを決定する要因の一つになると思われる。

[8] ⑿は「あ，虹だ！」と文末に「ダ」が付与されているが，「あ，虹！」と「ダ」を削除しても同義である。このように述語を持たず呼格を中心として構成されているものは山田（1908）で「喚体の句」と呼ばれ，述語を持つ「述体の句」と区別される。

⑵⑹　(← 4 b)

【目の前にあるケーキをAが自分のほうに寄せながら】

A：あなた，ダイエット中だから甘いもの食べないでしょ。

B：食べる｛よ／？んだよ｝。

(26 B)の文内容は，発話時における話者の判断を述べたものであるが，発話に先立つ疑問や課題に対する答えとしての話者の認知判断とは考えにくい。では，聞き手への発話でもあるのだから，(26 B) が「ノダ」を伝達的用法として用いていると考えることはできないだろうか。発話内容自体は話者自身の行動に関するものであるので，当然聞き手ではなく話者が優位な立場で判断を行うことのできる情報といえる。しかし⑵⑹においては，「(ケーキを) 食べる」という話者自身の知識内容を提示しようとしているわけではない。結果として，話者の認知判断の表示としても，また伝達的用法としても，⑵⑹における「ノダ」の使用は不自然であるということになる。

「ノダ」が伝達的用法を発揮させる場合には，文内容が話者によって既に保持されており，知識となっていることが聞き手に伝えられる。話者が聞き手よりも優位な立場で取得，管理を行うことのできる情報であるとしても，それが発話以前から保持されていた知識であると示すことが妥当な状況でなければ，「ノダ」の使用は不自然となる。

⑵⑹に対して，以下の⑵⑺では「ノダ」文を用いることができる。この場合，(27 B) の発話内容は話者の発話時における判断ではなく，話者自身が発話以前から持つ知識といえるので，話者にとって既定性を有する内容である。

⑵⑺　【目の前にあるケーキをBが自分のほうに寄せている】

A：あなた，ダイエット中だから甘いもの食べないでしょ。

B：ケーキは別｛です／なんです｝。

(27 B) の発話内容は，「ノダ」の使用によって，話者による判断が発話以前に完了しており，話者が聞き手よりも優位な立場で管理できる情報であることが示される。これによって，「ダイエットをしていてもケーキは食べることができる」と決定する権利は話者にあるので，聞き手を含む他人によって変更することの困難な事態であることを伝えることができると思われる。

以上のように，「ノダ」の使用が不自然になる発話状況については，いくつかの理由が考えられる。まず「ノダ」の認識的機能としての使用においては，文内容について話者による知覚判断以上の認知判断の存在が必要である。また，「ノダ」文が聞き手に対して発話され，伝達的用法を発揮させる場合，文の内容が話者の知識であると伝えることが妥当な状況でなければ，「ノダ」文によってその内容を提示することが不自然になったり，期待する効果を生まなかったり

する。加えて，「ノダ」文の内容について話者が聞き手よりも優位な立場で情報を管理できると述べることが，妥当な発話状況である必要がある。つまり，聞き手に対して「ノダ」文を発することで，その発話内容が話者の知識であること，さらにその内容について聞き手よりも話者に決定したり変更したりする権利があると明示しても差し支えない会話参与者間の関係と発話状況がそろっていることが必要である。

5．検証結果

前節における検証の結果を以下にまとめる。まず，「ノダ」文の持つ既定性とは話者の㉘のような認知状態を表したものであると，本稿では結論づける。

㉘ 「ノダ」文の既定性

「ノダ」は，文内容について話者による一連の認知過程が存在することを表示する。

三つの検証点として，「ノダ」が表示する話者の認知過程とはどのようなものか，実際には話者の認知過程が存在しない場合，文内容は誰のどのような認知過程の結果であるか，またそれを「ノダ」文で表示する何らかの効果があるかということを取り上げた。その結果は以下のようにまとめることができる。

㉙ 「ノダ」使用における話者の認知過程

Ⅰ　話者による認知過程が想定できる「ノダ」文では，以下のような認知過程が概ね想定できる。

事態の知覚→疑問・課題→答え（「ノダ」文の内容）

Ⅱ　話者による認知過程が想定できない「ノダ」文は，聞き手への伝達的用法として発話に用いられる。

① 「ノダ」文の内容は話者の知識である。

② 「ノダ」文の提示する情報について，話者が聞き手よりも判断したり管理したりする権限があり，聞き手は話者から情報を与えられる側の立場であることが含意される。

（29-Ⅰ）に該当する「ノダ」文では，話者の認知過程の存在が明示されることから，「ノダ」の認識的機能と言うこともできる。一方，（29-Ⅱ）は聞き手への発話においてのみ見られる機能であるので，「ノダ」の伝達的な用法として位置づけることができる。先行研究においても，「ノダ」には認識的機能と伝達的機能があることを指摘されているが(野田 1997，益岡 2007 等)，

本稿における検証も，結果的に二つの機能の分化についてはこれを一部支持するものとなった。ただし，本稿の検証結果では，先行研究と大きく異なる点もある。それは，「ノダ」の形式的，及び認知的特徴から言うと，本質的な意味として認められるのは上述の（29-Ⅰ）の機能，つまり先行研究では発見用法，または解釈用法と呼ばれている「ノダ」の機能だと考えられる点である。聞き手への発話において用いられる場合は，「ノダ」の表示する既定性を聞き手に伝えることで，発話状況によって話者と聞き手の間に異なる関係性を表すことのできる一つの用法だと考えられる。

多くの先行研究では，先行文あるいは発話状況について「説明」などある種の「関連づけ」が「ノダ」文によって提示される場合，また「ノダ」文の話者が聞き手に，ある事態の解釈を提示する場合を中心に取り上げ，「ノダ」の機能が論じられてきた。しかし，実際はこれらの「ノダ」文が必ずしも「ノダ」本来の意味を反映していないために，「ノダ」全体に該当する，本質的な意味機能を提示することが困難であったと考えられる。

本稿の結果は，これまで必ずしも主要な用法とは位置づけられなかった「ノダ」例が，形式的及び認知的考察からいえば，「ノダ」の本質を最もよく表しているということを示唆する。「ノダ」によって，先行発話や発話状況に対して，いわゆる「説明」を行う場合とは，聞き手の存在や「ノダ」文の内容，話者による「説明」を許容する状況など，ある一定の条件を満たした場合においてのみ可能となるものといえる。

結論として，⑽の提案に「ノダ」の用法を追加したものを㉚として再提案する。

㉚ 「ノダ」の意味

「ノダ」は，話者による一連の認知過程が存在することを明示し，「ノダ」文の内容は話者による認知判断の結果である。

「ノダ」の伝達的用法

用いられる状況：聞き手に話者の持つ知識を伝える

効果：話者による認知過程の存在を明示することで，話者がその文の情報を判断したり管理したりできる立場にいることを伝える。

6．まとめと課題

本稿では「ノダ」の持つ本質的な意味を，話者の認知状態を明示する認識的機能にあると捉えた。「ノダ」によって示される話者の認知状態とは，自身が知覚判断したある事態に対して疑問し，答えを見出すという認知判断がなされた状態である。そして，「ノダ」を聞き手に対して用いることによって生じる伝達的意味は，ある特定の状況において，「ノダ」本来の意味から生じ，また許容されるものであると本稿では結論づける。

上記のように本稿では，「ノダ」がある発話場面において利用されることで生じる意味を，聞き手に対する「ノダ」の伝達的用法として捉えている。しかし，既に見たとおり，この伝達的用法は聞き手の存在だけを使用条件とするものではなく，他の要因もその使用の許容性に関わっていると思われる。「ノダ」の持つ本質的な意味と，そこから生じる伝達的用法への連続性，その用法の成立条件を明らかにすることが今後の課題である。

また，本稿では「ノダ」の伝達的用法から生じる各発話状況での具体的な語用論的効果を詳しく列挙することはできなかった。先行研究で指摘されている「ノダ」の用法と比較しながら，実際の発話における「ノダ」使用の効果と，それらの効果が生じる条件などについても，今後整理する必要があるだろう。さらに，「ノダ」の伝達的用法が発揮される状況の一つとして，「ノダ」を用いた疑問文「ノデスカ」についても，「ノダ」のない通常の疑問文と文内容に対する話者の捉え方，話し手と聞き手の関係がどう異なるのか，本稿の結果を踏まえて考察できるのではないかと思われる。これらの考察については別の機会に論じるつもりである。

（なかの　ゆり・言語文学専攻）

参考文献

庵功雄（2001）『新しい日本語学入門　ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク.
庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
内田聖二（1998）「『(の）だ』── 関連性理論からの視点 ──」，『小西友七先生傘寿記念論文集　現代英語の語法と文法』pp.243-251，大修館書店.
梶浦恭平(2008)「ノダの手続き的意味 ── 説明のノダ文を中心に ──」『第 11 回大会発表論文集』第 4 号，pp.31-38，日本語用論学会.
加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
国広哲弥（1992）「「のだ」から「のに」・「ので」へ ──「の」の共通性」，カッケンブッシュ寛子他（編）『日本語研究と日本語教育』pp.17-34，名古屋大学出版会.
久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店.
国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞 ── 用法と実例 ──』秀英出版.
佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』（「『のだ』の本質」（1981）再録）ひつじ書房.
竹内道子（1994）「関連性に関する制約 ──『のだ』をめぐって ──」，『ふじみ』16，pp.3-16，富士見・言語文化研究会.
田野村忠温（1990）（再刊 2002）『現代日本語の文法 I ──「のだ」の意味と用法』和泉書院.
辻幸夫（1991）「カテゴリー化の能力と言語」『言語』20-10，pp.46-53，大修館書店.
辻幸夫（編）（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社.
角田三枝（2004）『日本語の節・文の連接とモダリティ』くろしお出版.

名嶋義直（2007）『ノダの意味・機能 ── 関連性理論の観点から ──』くろしお出版.
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版.
林大（1964）「ダとナノダ」時枝誠記･遠藤嘉基（監修）『講座　現代語 6　口語文法の問題点』明治書院 282-289.
藤城浩子（2007）「ノダによる「強調」「やわらげ」の内実」『日本語文法』7-2，pp.171-204，日本語文法学会.
本多啓（2005）『アフォーダンスの認知意味論 ── 生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版.
三上章（1953）（くろしお出版復刊 1972）『現代語法序説』乃江書院.
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川学芸出版.
山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館.